

# 『児童研究』における発達思想の形成

前田 晶子\*

(2008年10月30日 受理)

*Developmental Ideas in the Journal of Child Research*

MAEDA Akiko

## 要約

本研究は、日本で最初の児童学の専門雑誌『児童研究』を対象として、発達思想の形成過程について調査したものである。具体的には、医学者富士川游の本雑誌へのかかわりと彼の病理学的関心の展開を考察することで、developmentの翻訳語として導入された「発生」「発達」などの語が、日本の教育領域においてどのように深められたのか、その特徴の一端を示した。

キーワード：発達概念、『児童研究』、富士川游

## はじめに

子どもをめぐる病理的現象への注目は、近年強まりをみせているといえる。とりわけ、1997年に起きた神戸連続児童殺傷事件を端緒として、子どもの問題行動の背後になんらかの病理的原因があるのではないかという見方は一般的なものとなっているのではないだろうか。

他方で、脳科学などの展開の中で、乳幼児や子どもの発達メカニズムをこれまで不可視だった脳機能の諸反応でとらえることが可能となってきており、そういった意味で、子どもに対する生理学的研究は、かつてない微細なレベルにまで到達してきているといえよう。

子どもに対する病理性の指摘と、生理的反応レベルにおいて成長・発達を解明しようという動向は、その目的や領域は異なるものの、ともに教育の場における「科学的まなざし」を強化する効果をもたらしていると考えすることはできないだろうか。子育てや教育が、急速な時代の変化のなかで揺らいでいる今日、こういった科学的言説の与える信頼性や根拠性は、近代科学に対する諸種のポストモダンの批判が展開して以降もなお、失われていないように思われる。

ところで、日本の教育学説史を紐解いてみると、教育と医学や生理学の関わりはそう緊密ではなかったように思われる。たとえば、1930年代に行われた「発達論争」<sup>1</sup>は、日本の心理学者や

---

\* 鹿児島大学教育学部 准教授

教育学者による子どもの発達をめぐる本格的な論争の嚆矢として注目されるものであるが、そこでは発達の社会・歴史的規定性を重視する立場（城戸播太郎、波多野完治、小野島右左雄ら）に対して生物学的規定性を主張した山下徳治が、子どもという存在を現実社会と切り離してとらえる観念論であると批判された。このように、日本の教育学・心理学において、「生活」や「文化」がキーワードになることはあっても、「生理」や「遺伝」が積極的な主題となることはさほど多くはなかったのではないだろうか。あるいは、そういった言辭は、優生学的決定論につながるとして、教育の領域ではあえて忌避されてきたのかもしれない。

筆者は、これまで、日本の発達概念の形成史を辿る中で、その身体論の脆弱性について検討を加えてきた。具体的には、development の翻訳作業と訳語の定着過程について、次のような結論を導いてきた。すなわち、development の翻訳作業において登場した訳語のうち、「発生」と「発達」という二種の訳語に着目すると、明治初期の教育関係書においては、身体面に対して「発生」、知能・精神面に対して「発達」が用いられ、その後前者は生物学や医学、後者は教育学や心理学において用いられるようになったということである。このような訳語分化から推測されるのは、子どもの成長における当初からの身体論と精神論の分裂、さらにいえば、教育の領域における発達概念の精神面への傾斜という問題である。以上のように考えると、近年の教育における病理学・生理学的指向性の強まりは、教育実践上のみならず、学説史研究としても注目される場所である。

近年の発達概念をめぐる学説史の批判的研究やエスノ心理学、社会・文化的アプローチなどに代表される新しい発達理論の登場<sup>2</sup>は、従来の発達研究の要素主義や実験中心の方法論の乗り越えという意味で重要性をもっている。しかし、同時に、「発生」論の使命とする観念論や思弁的哲学への批判という課題—身体論的契機—に照らしてみれば、その価値を問わずして一蹴することはできないのではないか。また冒頭で述べた近年の教育を巡る動向をみても、近代日本における「発生」論の系譜を追うことの意味は少なくないと考えている<sup>3</sup>。

## 1. 『児童研究』に頻出する「発達」

日本では、development の翻訳作業が一つの転機を迎えるのは 1880 年代であったと考えられる。それまで、「解ク」「明カス」など蘭学時代を引きずった訳語選択が行われてきたのが、柴田昌吉／子安峻『増補訂正英和字彙』（第二版、1882 年）においてはじめて「発達」と対応することとなり、また「開達」「啓發」「發育」などの熟語とも対訳関係をもつようになるのである<sup>4</sup>。

他方、小児科書領域においては、早くは幕末 1840 年代から蘭語：ontwikkeling を「発生」と翻訳してきた歴史がある。その後、明治期になって、旧来の蘭医学から独・米を中心とした西洋医学へと展開して以降も、その訳語は継続されて用いられている<sup>5</sup>。「発生」は、子どもの身体に起こるさまざまな変化（成長や疾病）の顕現を指す概念として採用されたものであった。ところが、子ども研究という点では小児科と課題を共有する教育関係書（育児書など）においては、「発生」

は多用されず、development の訳出とは異なる文脈において「発達」の語が登場するようになり、とりわけ精神的成長に限定して用いられるようになっていたのである。つまり、日本における発達概念の形成過程においては、当初から「発達」の身体的成長と精神的成長の統合的把握という道は狭いものであったということがいえる。

ところで、本論文で取り上げる『児童研究』は、子どもをトータルに、かつ科学的にとらえる使命を負って登場したものである。成長過程における身体面と精神面の分裂を課題としてとらえ、その統合に取り組んだものとして注目される。子どもの育児や教育において医学・生物学・生理学などの知識が重要であるという自覚のもとに編集・発刊されているだけに、両者がどのように統合されようとしたのか興味深い。

本雑誌の創刊は 1898 年であり、すでに辞書上において、development と発達が対応するようになってしばらくのときが経過している。それゆえ、『児童研究』には、「発達」が頻出していること

(表 1) 「発達」と「発生」の用法(『児童研究』第 1 巻第 1 号、1898 年 11 月)

発達	総数	72
	身体の～	1
	精神の～	41
	児童・人間の～	9
	人類・社会の～	3
	学問の～	4
	発達研究の～	11
	教育の～	3
発生	総数	6
	自我・自己の～	3
	道徳の～	1
	精神の～	1
	発生学	1

ことが確認される(表 1)。この表は、『児童研究』第 1 巻第 1 号(1898 年 11 月)における「発達」および「発生」の出現総数と、その使用傾向についてまとめたものである。これをみると、発達の語が頻出しているということ、なかでも精神面(この中には道徳性の発達、知性の発達などが含まれる)に対して用いられる傾向が強いことがわかる。また、「人類を教育せんとするに當り精神活動の性質及び其發達の法則を明にせずして之を教育せんとするものあらば人之を何とか云はむ」(元良勇次郎「祝辞」、『児童研究』第 1 巻第 1 号—傍点引用者)というように、現在の一般的な用法との違いは特にみられない。他

方で、「発生」の語はほとんど登場していないことも、はっきりとした傾向として指摘できよう。

では、本雑誌は、発達概念における発生論や身体論の不足という問題を、どのように課題化し、また乗り越えようとしたのか。そこに発達概念の理解や深まりはあったのだろうか。これまで、発達研究における小児医学の役割については注目されてきたが、両者の関係分析の必要性が指摘されるにとどまっている<sup>6</sup>。そこで、以下では、高島平三郎(1865—1946)とともに『児童研究』を長期に渡り支えた医学者富士川游(1865—1940)に注目して、発達概念における生物学的視点の深化(とりわけ富士川の場合は病理学のそれ)を検討していきたい。

## 2. 「発生学」への関心

『児童研究』の書誌学的分析は、下山の研究に詳しい<sup>7</sup>。それによれば、戦前期の本雑誌は、欄

項目の変化より3期に区分することができるという。すなわち、1989年11月～1907年6月の「導入・模索期」(第一期)、1907年7月～1926年6月までの「整備・拡充期」(第二期)、1926年7月～1944年11月までの「安定期」(第三期)である。この中で、「教育病理学」「教育衛生」「教育治療学」「学校衛生」など、医学的・生理学的項目が目次に並んだ第二期は、本論文が注目する発生論的発達論の見地から他の時期に比して重要であると思われる。またこの時期の編集は、高島平三郎が一手に引き受けている点も特筆される。ただし、下山も指摘するところであるが、この期の「教育病理学」欄をみると、海外とりわけドイツの理論家の翻訳がその中心を占め、日本人学者による執筆は限られている。その意味で、第二期をもって各学問分野が有機的に連携し、子ども研究を深めたといえるかどうかは、留保が必要であろう<sup>8</sup>。

発生論的な発達論への関心については、実は雑誌の草創期から表明されてきた点である。1897年に、高島が『教育壇』に発表した論文「小児研究」の中では、その研究領域として「人類学的、生理学的、心理学的等、各種ノ方面ヨリ研究スベキナリ」と指摘されている<sup>9</sup>。また、日本の心理学史としては初期のものとして知られる「我国に於ける児童研究の発達」(『児童研究』第1巻第2号、1898年12月)においても、高島は次のように述べて「発生学(エムブリオロジー)」の重要性を指摘している。

発生学にして、生物学の進歩に特効ありしを見ば、小児の心、即心の胚芽(エムブリオ)ともいふべきものを研究することの、心理学上及び教育学上に与ふるの利益は、如何に大なるべきか<sup>10</sup>

また、『児童研究』の「発刊の辞」(第1巻第1号)においては、医学や生物学、生理学、解剖学等の学問分野がこぞって子どもの心理を研究し、それらを包摂する「児童学」なる名称が生まれたこと、さらに子ども研究が各領域に「新光明を与ふべき秘密」があると述べられており、単なる領域の羅列を超えて、研究対象としての子どもの登場が各学界にもたらすダイナミズムについて強調されている。すなわち、「発生学」という新鋭の学問の勃興が、子どもをアカデミズムの対象として生起させたという認識の下に、心理学を超える広い理論的関心と、教育への貢献という実践的目的の双方において大きな役割を担っていたことがうかがえる。

高島はまた、「小児研究」の方法論としての「観察」論においても、身体状況把握を重視していた。それは「身心相関ノ状態」を把握するためであり、また進化論的見地から子どもの発達の順序を押さえるためであるとしている<sup>11</sup>。

以上から、『児童研究』発刊当初から、その関心は医学や生物学にも向けられており、とりわけ「発生」のメカニズムの解明が課題の一つとなっていたことがうかがえる。

しかし、その後の『児童研究』の歩みの中で、繰り返し生物学や医学のアプローチの欠如が雑誌の弱点として語られている。例えば、発刊から6年目に日本児童研究会の機関誌となった際の「論説」には次のように書かれている。

(表2)『児童研究』をめぐる動向

事項	年	備考
日本教育研究会	1890	創設者：今泉祐善、伊藤永司、橋本正太郎、本庄太一郎、堀尾金八郎、外山正一、岡村常之丞、萩野忍、岡幸助、尾崎弥太郎、神田乃武、丹所啓行、高島平三郎、染谷菊三郎、堤虎造、永江正直、山崎彦八、藤井長蔵、桐谷文平、元良勇次郎、森利平
児童研究組合（大日本教育会内）	1895	堀尾金八郎、高島平三郎、後藤牧太、嘉納治五郎、黒田定治、篠田利英、谷本富、松本亦太郎、元良勇次郎
『児童研究』創刊	1898	教育研究所発行
日本児童研究会	1902	会長：元良勇次郎、幹事：榊保三郎、松本孝次郎、高島平三郎、下田次郎
『児童研究』日本児童研究会機関誌	1903	第6巻第1号
日本児童研究会 再編	1907	
日本児童学会	1912	日本児童研究会を改称、機関誌『児童研究』は継続
『児童研究』休刊	1944	
『児童研究』再刊	1946	

舊轔日本児童研究会の成るや、心理学者は医学者生理学者と握手し、教育学者若しくは実際教育家は、社会学者若しくは社会改良家、及び人類学者等と提携し、是等あらゆる科学の方面より児童を研究せんとするの基礎こゝに確立するに至れり。されば本会の機関としての本誌は従来の心理的教育的研究に加ふるに更に生理的病理的人類学的等各種の研究を掲載して児童研究の職分を全うせんことを期すべきなり。<sup>12</sup>

さらに、1907年に行われた同研究会の組織替えの際には、これまでの歩みの反省として次のような弁が登場している。

スナハチ向上的ニハ心理学、倫理学、論理学、法学、社会学、宗教学等ヨリシ、向下的ニハ生物学（解剖学、生理学）、文化史学等ヨリシ、側面的ニハ動物心理学、人類学等ヨリシ、各科ノ知識ヲ籍テ、以テ児童ノ研究ヲ十分ニスルコトヲ期スベキナリ。<sup>13</sup>

上記の引用は、『児童研究』第10巻第7号の巻頭論文であり、執筆者は富士川游である。彼の、児童研究に教育病理学を導入したいという医学的判断が前面に出された論文であるが、それを巻頭に掲載している編集者高島平三郎の意図も明確に読み取れるだろう。このときの組織替えについては、後年、日本児童学会の沿革が書かれる際にも、「従来は専ら心理学的、教育学的の研究を中心としたるも今後は身体的の方面より、更に一大研究をなし、児童心理学・教育心理学の他に、教育病理学・教育治療学・教育衛生学・学校衛生学・小児科学等の諸方面より攻究するため、心理学者、医学者、教育家及び児童保育者の協力を得ることとなり」<sup>14</sup>と同様の説明がなされている。

以上のような経過をみると、いかに心理学や教育学と、生理学や病理学が共存しにくかったかということが逆にみえてくるのではないだろうか。例えば、医学領域で使用される「小児」という表現自体、高島によって「小児研究」として初期に用いられて以降は、児童学や児童心理学の領域において登場することはなくなるという指摘がある<sup>15</sup>。このような両者の距離が、学問的方法論の違いに起因するのか、それとも理論的関心と実践的関心のズレによるものなのか、または「発達」と「発生」の訳語分化という日本の現象なのか、今後更に検討していきたいと考える。以下では、その手がかりを得るための作業として、富士川の論考に注目して、彼の児童研究に対する関わり方を検討していきたい。

### 3. 児童研究の「科学性」をめぐる

先にも触れたように、『児童研究』は、1907年7月号より編集を高島平三郎が引き受けている。と同時に、高島と同年の生まれであり、また同郷の出身でもある富士川游は、『児童研究』の方向性を決定付ける立役者として関わりを強めていくのである。

下山によれば、『児童研究』の「論説」欄が充実した時期は1920年代から40年代にかけてであるが、雑誌の「顔」である当欄の頻出著者（著者名が判明するもののみ）は、富士川游（26回）、高島平三郎（22回）、桐原葆見（12回）、三田谷啓（8回）と続くという<sup>16</sup>。富士川が、高島を上回る貢献をしていることが注目される。また桐原葆見は、富士川の妻の甥にあたり、帝大在学中は富士川宅に寄寓していた関係であったことから、富士川の影響力の大きさがうかがわれる<sup>17</sup>。医学者として三島通良や三田谷啓もまた医学的見地から『児童研究』に執筆しているものの、雑誌運営という役回りにおいては富士川ほど大きくはなかったのではないと思われる。

ところで、高島と富士川の連携体制について触れてきたが、両者の間には身体論への関心のありように差はなかったのだろうか。高島は、第2巻第9号に「精神進化論」という論考を発表しているが、そこでは、子どもの精神発達を進化論に重ねて論じる典型的な進化論的発達観を有していたことがうかがえる<sup>18</sup>。この点において、高島の子どもの発達段階の解明とそれに応じた教育の有り方の追及は一貫しているといえよう<sup>19</sup>。

他方、富士川の場合は、医学者という立場から、「病理学」への関心を媒介として『児童研究』に関わるようになったという経緯がある。彼の最初の論考「学齡児童の色情に就きて」（第2巻第9号）では、ドイツ留学中ということもあって、当地における教育病理学研究を紹介しながら、『児童研究』への病理学の導入の要求と、実際の教育現場における「身体發育」への関心の低さを指摘して次のように述べている。

貴所発行の「児童研究」雑誌を見るに、精神生理的及び病的の方面に於ける研究の欠けたるが如く見ゆるを覚ゆ。＜中略＞児童研究を真に科学的に為し、而して之を教育の原理の上に応用せむとならば、先づ神経系統

の生理的及び病理的機能を研究するの要ありと信ずればなり。<sup>20</sup>

そして、「小児欠陥 *Kinderfehler*」の療法としての「教育治療学 *Pädagogische Pathologie*」の重要性を主張するのである。このように、初期の『児童研究』においては、高島と富士川の関心の所在は、児童研究の「科学性」の中身をめぐってずれがあったことが指摘されよう。

また、興味深いことに、高島とは対照的に、富士川の論考では「発達」という語よりも「発育」「生長」などの語が用いられる傾向がみられる。(表3)は、当研究会の組織替えが行われるまでの1989年から1907年の間に掲載された富士川の論考の一覧である。これは、先にみた下山の時期区分でいうと第一期の『児童研究』の揺籃期にあたるが、富士川の初発の関心が象徴的に表れているといえる。この表から、富士川が、従来の児童研究に「教育病理学」を導入することに熱意を傾けていたことがうかがえよう。第二期以降の分析は、他日に譲るが、このような志向性は一貫して継続されたと推測される<sup>21</sup>。

さて、富士川の児童研究への病理学の導入の具体像であるが、「教育治療学」(第9巻第4号)という論考に次のように例示されている。

例之へば伯林のドクトルフユルステンハイム氏の如きは之(異常小児—引用者)を区別して、

- (1) 知呆白痴 (*Idioten, Imbecille*)
- (2) 精神低格者 (*Psychopathische Miuderwertigkeit*)
- (3) 少年犯罪者 (*Jugendliche Verbrecher*)

となせども、此の如きは其區別余りに簡単にして、学問上及び実際上の価値多からず。この点については爾他諸家の説あれども、余は異常小児を左の如く分類するを可なりと信ず。

- (1) 精神薄弱 (*Geistesschwäche*) のもの
- (2) 身体疾病のために精神生活の異常を致せるもの
- (3) 覚官の欠陥あるもの(盲、聾、啞、吃者)
- (4) 精神病のもの(白痴、癲癇)

精神病理学若くは心理学上より異常小児を分類するに方りては、固より更に適切な学問学的分類法を立つることを得べし。而かも、教育病理学及び教育治療学の見地よりすれば其対象とする所は一に児童の被教化能力にあらざるべからず。<sup>22</sup>

従来は、児童学では教育への適応というところに関心が集中しているきらいがあるが、富士川はその「被教化能力」という指標を乗り越える研究の広がりをもたらすものとして教育病理学を位置づけようとしているのである。

(表3)『児童研究』第一期における富士川の論文一覧

巻号	年	タイトル	概要	用例	発達	発育	発生	生長	
2	9	1900.5	学齢児童の色情に就きて	小児欠陥と教育病理学・教育治療学の概説、および色情問題の発生原因についての分析	「正規発育」「発生する疾病」		2	1	
6	2	1903.2	学校生徒の酒精濫用	フレーリヒの調査研究の紹介					
6	2	1903.2	哺乳児の乳汁分泌	ド・シニチーの研究の紹介					
6	3	1903.3	小児の夢	サンクテスの調査研究の紹介	「精神機能の発育」「恐怖の発育」		3		
6	8	1903.8	学校生徒の歯牙の不良	ドイツの学校医による調査紹介					
6	8	1903.8	小児の結核	小児結核の特徴					
7	7	1904.7	児童の身体(上)	教育・心理学における医学・病理学の重要性の指摘と、身長についての説明	「児童の自然的発達」「精神の発育」「身長発育」「身長の生長」	1	5	4	
7	8	1904.8	児童の身体(下)	「生長病」の原因、徴候、療法についての解説	「生長の病」「生長異常」「身長の発達」「身長の発生」「身体発育」「身体及び精神共に発育十全」	2	10	1	18
9	4	1906.4	教育治療学	教育治療学の概説、および療法と教育についての説明	「言語は発達甚だ遅く」「身長発育」	1	1		
10	5	1907.5	精神上変性の起る原因	神経質の生じる文化的背景の説明	「神経質の発生」「脳の発育」		1	2	
10	7	1907.7	児童研究	児童研究として、医学、児童心理学、教育病理学、教育治療学など多面的な研究の重要性を指摘	「児童ノ自然的発育」「精神ノ発育」「言語ノ発達」「発生学」「異常児童ノ発生」	1	3	2	
10	7	1907.7	学生神経質	子どもの神経質の現れ方についての説明	「神経質の発生」			1	
10	10	1907.10	色情の教育	ドイツにおける色情教育の現状紹介	「人間の発達」「発育期」「胎児の発育」	1	2		
10	11	1907.11	色情の教育(承前)	医者による色情教育のあり方の提案	「病の発生」「情欲の自然的開発」			1	
10	11	1907.11	学校医職務章程	ドイツ・ミュンヘンの学校医職務章程の紹介					
計						6	27	8	22

心理学史や児童学史においては、身体論や発生論への傾斜が優生学思想へと展開することを踏まえて、社会・歴史へのアプローチをもって学的发展と位置づける見方がある。『児童研究』についても、単純な遺伝説から優生学思想へと展開する流れとして批判的に位置づけられている<sup>23</sup>。しかし、本研究でみてきたように、『児童研究』の担い手たちは、いかに精神的発達と身体的発達をトータルにとらえ、総合科学的に子どもを研究するかという点に苦心していたことがうかがわれた。このことは、当初からの日本の発達概念理解のもっていた分裂的傾向を乗り越える試みであったと位置づけることが出来るのではないかと。しかし、富士川らの試みがどのような成果を上げたのかについては、第二期以降の『児童研究』の全体的な検討が必要であると同時に、1930年代に行われた発達論の問い直しとの関連で考察していくことが不可欠であろう。

付記：本研究は、科学研究費補助金若手研究（B）「近代日本の教育学と発達概念の展開」〔課題番号：10347081〕の研究成果の一部である。

- 1 『教材と児童学研究』（主催：山下徳治）誌上において展開された1934年の論争。
- 2 例えば、森田尚人「発達観の歴史的再構成」『教育学年報3』世織書房、1994年、小嶋秀夫・速水敏彦・本城秀次編『人間発達と心理学』金子書房、2000年、ワーチ『心の声』福村出版、田島信元・佐藤公治・茂呂雄二・上村佳世子訳、1995年などを挙げるができる。
- 3 前田晶子「近代日本の発達概念における身体論の検討」『鹿児島大学教育学部研究紀要』教育科学編、第59巻、2008年。
- 4 前田晶子「明治初期の子育て書における発達概念の使用」『鹿児島大学教育学部研究紀要』教育科学編、第56巻、2005年。
- 5 前田晶子「成長論における翻訳語彙の役割」『一橋論叢』第124巻第4号、2000年。
- 6 木内陽一「児童研究・児童学・実験教育学」『鳴門教育大学実技教育研究』第2巻、1992年。
- 7 下山寿子「雑誌『児童研究』の研究（1）—書誌的分析を中心として—」『高崎商科大学紀要』第19巻、2004年、p.166。
- 8 例えば、1907年から1932年までの富士川の「教育病理学」欄における執筆は、33件中1件のみで、他は翻訳である。下山寿子「雑誌『児童研究』の研究（2）—「教育病理学」欄にあらわれた教育病理—」『高崎商科大学紀要』第20巻、2005年。
- 9 高島平三郎「小児研究」『教育壇』第4号、1897年5月、p.4。
- 10 高島平三郎「我国に於ける児童研究の発達」『児童研究』第1巻第2号、p.11。「日本教育研究会」の活動についての説明文である。
- 11 高島平三郎「小児研究（二）」『教育壇』第5号、1897年6月、pp.34-35。
- 12 「論説」『児童研究』第6巻第1号、1903年1月。
- 13 富士川游「児童研究」『児童研究』第10巻第7号、1907年7月、p.4。
- 14 「日本児童学会沿革（二）」『児童研究』第41巻第2号、1942年1月、p.37。
- 15 石井房枝「高島平三郎の小児研究と明治期における児童心理学」『四日市大学短期大学部紀要』第29巻、1995年。
- 16 下山寿子「雑誌『児童研究』の研究（3）—「論説」欄と教育病理—」『高崎商科大学紀要』第21巻、2006年、p.129。
- 17 富士川英郎『富士川游』小澤書店、1990年。なお、桐原葆見は、1920年代から労働科学研究所において労働心理学を担った人物であり、青少年の労働を通じた発達論を展開して、教育に大きな影響を与えた人物である。木村元・前田晶子「労働科学における発達論の展開」木村元編著『人口と教育の動態史』多賀出版、2005年。
- 18 高島平三郎「精神進化論」『児童研究』第2巻第9号、1900年5月。
- 19 本論文では、高島の発達思想について中心的に取り上げていない。高島についての研究としては、次のものを参照のこと。石井房枝「高島平三郎の小児研究とその時代」『日本心理学史の研究』法政出版、1998年、飯田宮子「高島平三郎の心理学研究（1）～（3）」『東京立正女子短期大学紀要』1996～1998年など。
- 20 富士川游「学齡児童の色情に就きて」『児童研究』第2巻第9号、1900年5月、p.14。
- 21 下山は、1907年7月～1926年6月までを第二期として、その時期の「教育病理学」欄の書誌学的分析を行っている。それによると、「教育病理学」欄における内容の割合は、「発達障害」が最も多く26.6%、「精神病」17.0%、「反社会的問題行動」12.6%と続く（前掲「雑誌『児童研究』の研究（2）」）。さらに、『児童研究』における当欄の役割が、おもにドイツを中心とした海外の病理学研究の紹介であったことが指摘されている（前掲「雑誌『児童研究』の研究（3）」「論説」欄と教育病理）。
- 22 富士川游「教育治療学」『児童研究』第9巻第4号、1906年4月。
- 23 野村泰代「日本における児童研究の歴史的展開（第Ⅱ報）」『福岡教育大学紀要』第53号第5分冊、2004年。